

はっくつ2009

集落内の川跡から多量の土器が出土

中沢遺跡 弥生時代

中沢遺跡は、弥生時代前期（今から2,200年前頃）からの遺跡で、隣接の草津市にも広がる大きな遺跡です。これまでの調査では、安定した米作りを支える高度な治水技術を持った人々が、堰（せき）や用水路を利用し、生活していたことがわかっています。また、弥生時代に続く古墳時代（今から1,700～1,400年前頃）では、竪穴住居や堀立柱建物で構成される集落や古墳群が見つかっています。そこでは、「水辺のまつり」に関連する土器や、建物の扉やはしごなどの建築部材や、鋤・鍬などの農耕具をはじめ、容器や紡織具など豊富な遺物が出土しています。

今回の調査では、狭い範囲であったにもかかわらず、弥生時代の後期（今から1,900年前頃）の多くの建物の跡が見つかりました。もちろん何百年も一つの集落が綿々と営みつづけたわけではありませんが、米作りを営む人々にとっては、建物のすぐそばに川が流れるこの地が、一等地であったらしく、何世代にも渡って、建物が建てられた跡の柱穴と多くの土器が発見されました。（猿向）



川跡から出土した壺



川跡とたくさんの柱の跡

古墳時代～奈良時代の集落を発見

小野遺跡 古墳～奈良時代

小野遺跡は安養寺山山麓から日向山山麓にかけてひろがる丘陵地と、葉山川に沿って延びる自然堤防状微高地にはさまれた、扇状地性低地に位置します。

今回の調査では、これまで実態が明らかでなかった小野遺跡の様子が、明らかになってきました。そのひとつは古墳時代前期の集落です。古墳時代の開始とともに、野洲川左岸の高野・岩畑遺跡で大集落が展開することが知られていましたが、

今回の調査で古墳時代前期の竪穴住居や掘立柱建物、土器を多く含む土坑がみつかり、集落が旧葉山川の左岸にも継続して営まれていたことがわかりました。

次に中心となる時期は飛鳥～奈良時代で、掘立柱建物群が形成されていたことがわかりました。これらの建物は方位によって大きく4グループに分かれ、建物群の変遷を示すと考えられます。掘立柱建物の柱穴からは円面碗の破片が見つっています。この



発見された土器（古墳時代）

時期には、隣接する手原遺跡で寺院が造営され、奈良時代後半には官衙があったとみられています。また南西約2kmの岡遺跡で奈良時代の栗太郡衙が造営されます。この時期の集落としてはこれまで狐塚遺跡、椿山遺跡などが知られていましたが、今回の調査で新たに丘陵の縁辺部において建物群が発見され、官衙とそれに関連する集落の関連を知る上で貴重な資料になりました。（雨森）



古墳時代の竪穴住居と飛鳥～奈良時代の掘立柱建物



遺跡全景（西よりみる）

再び大型掘立柱建物を確認

手原遺跡 奈良～平安時代



4面底をもつ大型掘立柱建物（西から）

今年度の調査は、昨年度に引き続き手原東部区画整理事業の保留地造成工事に先立つ調査で、9世紀代と推定される大型掘立柱建物が確認されました。規模は、長辺東西5間（桁行12.3m）、短辺南北2間（梁間4.6m）、柱間2.3m前後で4面に底をもちます。底を含めた規模は、東西17m、南北9.3m、面積158㎡で、昨年度確認された南側地区の大型掘立柱建物より総面積では大きい建物となります。

建物の性格については、南側調査区で確認されていた大型建物同様に、掘立柱建物が密集する地域から少し離れて存在している点が注意され、可能性のひとつとして豪族の居宅的性格が考えられます。またその南側約100m先のトレンチにも、東西方向にのびる区画溝と4棟の掘立柱建物が確認されました。そのうちの1棟は、柱の掘方が一辺1m以上、深さ約1mの規模をもち、おそらく栗太郡衙とされる岡遺跡の倉庫に匹敵する建物になると思われます。

昭和60年度に、この場所から約50m東に行った

場所で一辺約5m、深さ約3.8mを測る大型の井戸が確認されていることから、小野遺跡方面に向かって存在するこれらの遺構も、役所関連の遺跡群として評価することができ、その距離は東西約1kmに渡っていた可能性があります。（近藤）



大きな柱をもつ掘立柱建物

大規模な井戸を発掘

林遺跡 鎌倉時代



井戸の調査風景

市北東部に位置する林遺跡では、新善光寺の西側約200mで昨年4月から住宅地造成に先立ち発掘調査を実施しました。

これまでに発掘された主な遺構は、古墳時代前期（4世紀頃）の竪穴住居8棟や鎌倉時代（13世紀頃）の掘立柱建物、溝、井戸などです。今回は、その中から鎌倉時代の井戸を紹介します。

見つかった井戸は大変大規模なもので、掘方と呼ばれる井戸を掘り込むための四角い穴の大きさが一

辺5.2m、深さは地面から下に4.4mもありました。井戸の底には直径38cmの小さな曲物を下に置き、その上に大きめの曲物を据付けていました。（曲物とは、薄い板に細かい切り込みを入れて筒状にまわめて桜の皮などでとじ合わせたものです。水分を含んだ粘土で密封されていたため保存されていました。）そして、曲物の少し上には石で築かれた円形の井戸枠が直径1m、高さ1.2m残っていました。石組は主に野洲川の河原に見られる長さ20cmほどの花崗岩を使い約十段積まれています。石組の上部に構築物は残っていませんでしたが、井戸が埋まった土の堆積状況から、木製の井戸枠が使われていた事が分かります。

ところで市内でこれまでに出土している鎌倉時代の井戸は、深さ2m前後のものが多いです。それにくらべ今回発見された井戸は大規模です。林の地は市内でも標高の高い地域であり水位も低いため、清浄な地下水を安定的に得るために4m以上も掘り下げる必要があったようです。

この井戸は鎌倉時代の林村の住人が共同で利用したものと思われます。

また遺跡内からは数基の墓が見つかりましたが、そのうちの二基からは、中国（南宋）からの輸入陶磁器の白磁碗が土師器皿や刀子とともに副葬品として納められていました。（佐伯）



土坑墓から白磁碗が出土



白磁碗 右が土坑墓出土品



栗東市

はっくつ 2009 栗東市話題の発掘調査

発行日 2010年3月31日

編集発行 (財)栗東市文化体育振興事業団

〒520-3011滋賀県栗東市下戸山47番地

栗東市出土文化財センター内

TEL077-553-3359 FAX077-553-3514

印刷 マルキ印刷株式会社